

牧野教官の気遣い

1964年卒 青木 謙二郎

『巨星墜つ！』我々牧野門下生にあっては正にこの言葉が的確であろう。日本航空協会より授与された『亀齡賞』も又、それを物語っている。私の現役時代は日本学生航空連盟（以降「学連」）職員兼、当航空部監督として采配を振るわれ、学生との間には絶大なる信頼の絆で結ばれていた。練習生は『少しでも操縦が上手になりたい』と焦るも結果が思うに任せず悩んでいると、『下手は下手なりの操縦でいいんだよ、その積み重ねが上手になる術なんだから。唯、安全はどこまでも第一にね』。決して精神論、根性論での威圧はなくクールに語られ説得力があった。どこ迄もクールな教官に私は一度、トンデモナイ飛行を披露した事が有る。3回生の冬、学連主催、生駒山上空での記録会が行われ当部の H-23C も貸出し手伝い参加をした。慣熟体験飛行に搭乗の機会を得、牧野教官操縦の曳航機パイパーに、H-23C 後席は原田教官同乗で八尾飛行場を風速 15m/秒もの強風下離陸、ハイトウ曳航で安定が悪く上下左右に振り廻されながら追隨する。そんな中、曳航機が左旋回に入った時、二呼吸程遅れて旋回に入るべきところほぼ同時に入ってしまい、機の内側に滑ってしまった。曳航索が大きく U 字形に弛んでしまい次に来る事態を予想すると体が強張って『シマッター』と思う間もなく『ガツーン』と曳航機との引っ張り合いを演じ強烈な衝撃を受けた。失速寸前の低速で曳航していた機は直ちに降下体制を取り、速度を得て再び正常の曳航上昇に移るのが判った。窮地は脱するものの曳航機から離脱後は精神的に参り、やがて着陸。原田教官は何も評価なし。牧野教官へ近づくと拳骨で頭部を『コツン』と軽くやられ『俺を地獄へ突き落すなよ！』と一言だけであった。このヘマ、自身に取っては大ショック

であり『何故あの時機首を右に振って衝撃を和らげる操作が出来なかったのか？』と自責に走った。牧野教官も恐らくハラワタが煮え繰り返り感情が爆発しても決して不思議で無いはずなのに冷静に済まされた。結論は『二度と同じヘマをやるな！』であろう。翌日、曳航機の後方監視員として搭乗、グライダー離脱後、牧野教官から『後席脇にある操縦桿を床の取付パイプにセットして操縦やってみろ』と願っても無い言葉を受け早速トライして見た。教官から『前方に見える工場煙突上空まで直線飛行』だったのだから何か変！すかさず教官の声『外の景色を見てみろ、斜め方向に飛んでいるだろう。プロペラが時計方向に廻っているので機体に逆トルクが発生、左方向へ進んでいるのだ！』成程、だから右方向舵ペダルを踏んで調整しろって事か！グライダーで横風を受け偏流修正角を維持しながら飛ぶのと同じ理屈…納得！右旋回操作も方向舵ペダルを少し踏むだけ、左旋回に至っては殆どペダルを踏まない。牧野教官には昨日、私が曳航機と引っ張り合いのヘマをやらかし叱責『しょげて居る』と思われたか？気分転換に曳航機パイパーの操縦桿を握らせて頂いたようだ。此処まで気遣われては恐縮の至りで有ったが、パイパー機の操縦は貴重な体験であった。晩年、牧野教官は 80 歳でパソコンをお始めになり私もメール仲間として交信しておりましたが何時も丁寧な言葉使いに恐縮しておりました。2015 年『長生きするのも疲れます』と珍しく弱気を伺わずメールが届いたので、すかさず『戦時、若くして逝った数多くの方々の為にもお辛いでしょうが長生きしてください』と交わしたのだが…空しく一年後ご逝去。誠に残念至極でございます。 合掌